

一期一会で起きていること

ー 見知らぬ者同士が会える過程のエピソード分析を通して ー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
清武 愛流

近年、コミュニケーションへの過剰な期待があり、とりわけ「コミュニケーション力」として偏りある文脈でコミュニケーションが重視されがちな風潮にある。しかし、コミュニケーションは、「出会い encounter」(Goffman 1961=1985: ii) という相互作用場面で機能し、「コミュニケーション力」として独自に定式化して特徴づけられるようなものではなく、すれ違うこと、わかりあえないこと、思い違いをすること、うまくいかないこと、偶然を活かすこともある。

本稿では、筆者の日常生活における見知らぬ者同士のコミュニケーション場面から、人間のコミュニケーションの豊かさを浮かび上がらせることを試みた。エピソードとして扱うデータは、可能なかぎり自然なかたちでの出会いを取り上げ、筆者を鏡として、そこに映る他者のコミュニケーション反応を会話のエピソードとして対象化した。

①「モノ」が作り出す発端、②場のもつ力、③誘惑の事情、④物語られる臨界を表現するエピソードをとらえた記述をおこなった。その結果、人はそれぞれの物語をもっており、日々の出会いのなかでその一部を交歓しあっている姿が浮かび上がった。それらは、個人が内在して保持するコミュニケーション力というよりも、場の力があつたと言える。場は、一定の志向性へと人を集めるため、そこから何かが弾むように会話が構築される可能性をもっていたからである。また、状況の力も作用していた。状況の多くは趣味が一致することで構成される会話であつた。また、儀礼的で挨拶的な会話以上に展開させるヒトの要素も状況を構成させる一部であつた。

多様なコミュニケーションが展開され、回避や擦り合わせをしながら意味を生成していく過程が見出せたといえよう。